

自分を動かす名言 佐藤 優

Maxims to Motivate

プライドが高くて傷つきやすく、自分を抑圧してきた人は、他人のことも批判の目で見ます。批判するには**正義を盾**にするのが最も簡単で、「**約束を守れ**」「**無視するな**」と常に自分を正当の位置に置きたがる。その意味ではストーカーは実に律儀で、まるで教師のような態度で「**誠意**」「**信頼**」「**道徳**」「**人として**」といった言葉を多用します。

私も「どうやったら恋人を見出すことができるか」という相談をときどき受ける。一人ひとりが独自の問題を抱えているため、こういう質問に一般的な回答はない。それでも、一般的に通用する、男女関係に強くなるコツが二つある。第一は経済的に自立し、自分一人で生活していけるという自信と客観的な根拠を持っていること。**第二は、他人の気持ちになって考える訓練ができて**いることだ。この二点が担保されていれば、ストーカーの被害者、加害者のいずれになる可能性からも、かなりの確率で免れることができる。

美しい女たちのことは、想像力のない男たちに任せておこう。 マルセル・ブルースト

2002年5月14日、

私は職場の外務省外交史料館（東京都港区麻布台）において、「鬼の特捜」（東京地方検察庁特別捜査部）によって逮捕された。容疑はイスラエルで行われた国際会議への公金支出をめぐる背任だったが、検察の目的は外務省と鈴木宗男氏をつなげる事件をつくることだった。結局、私が迎合的な供述をしないので、検察は宗男氏絡みの事件をつくるができなかった。検察官による厳しい取り調べ、**冷暖房がない独房での512日間の生活は、気合いを入れれば耐えることができた**。つらかったのは、外務省時代に信頼していた上司や同僚が検察に迎合して私を陥れる供述をし、それを供述調書で読んだときだ。人間は、どんなに信頼関係が確立していると思っても**裏切るのだ**ということを実感した。こういう供述をした人のほとんどは、私に対して悪意を持っていたわけではない。検察の激しい圧力にさらされたとき、人間には**過剰迎合**をしてしまうという性があるのだ。

恋愛とは、人間の感情の中でも最も面倒なものだ。燃え上がるような感情なので、理性で制御できなくなり、周囲の忠告も聞こえなくなってしまう。恋愛も愛情の一種であるが、恋愛だけを愛情と勘違いしてはいけない。ギリシア語では**愛情を3つに区別**する。第一が**エロース**で、これは自分に欠けているものが相手にある場合、それを求める熱烈な愛情を指す。恋愛もエロースに含まれる。第二が**フィリア**で、これは友人間で成立する愛情だ。相手を一方的に求めることをしない。お互いに相手の気持ちになって、尊重し合うのである。第三が**アガペー**だ。これは見返りを一切求めない、一方的な愛情を意味する。神の愛

はアガペーで表現される。キリスト教の牧師や神父は、エロースを軽視してアガペーに達する努力をするようにと説教するが、それは罪深い人間に対する実現不能の要求ではないかと思う。人間には喜怒哀楽の感情があるため、どんな人格者でも怒りや悲しみから完全に離れることはできない。また、エロースは仕事の動機になる。エロースから芸術作品が生まれることも多い。

外務省の先輩（男性）で、いつも恋愛をしている人がいた。決してハンサムではないが、よくモテた。女性とホテルに泊まって着替えずに役所に登庁しても汚れが目立たないように、カーキ色のワイシャツを着ていた。あるとき私とその先輩に「いろいろな女性とつき合っていて、よくトラブルに巻き込まれませんね」と水を向けた。するとその先輩は、「女性の方から逃げていく技法を身につければ、恋愛がトラブルに発展することはない」と言う。白人の女性なら、高級レストランでずるずる昔を立ててスープをすする、鼻糞をほじってテーブルクロスになすりつけるなどすれば、だいたい女性の方から逃げていくという。私が、「それでも逃げていかないときはどうするんですか」と尋ねた。先輩は、「そういうときには、白人にも日本人にも効果絶大な奥の手がある」と言って、こう続けた。「相手の両親の悪口を言うんだ。徹底的に罵倒する。そうすれば、どんな女性でも離れていく。僕は今までこのやり方で失敗したことがない」。たしかに、両親の悪口を言われたら不快になる。そして、そういうことを言う人とはつき合いたくないと考えるだろう。私は先輩に「そんなことをしたら軽蔑されるじゃないですか」と反論した。すると先輩は、「相手からずっと尊敬されたいなんて考えていたら、恋愛なんかできない。この女性がいいと思ったら全力で突進していく。そうすれば、かなりの確率で恋愛は成功する。しかし、面倒なことに恋愛はすぐ飽きる。だから、古い恋愛を捨て、新しい恋愛に進まなくてはならない。そのためには、今君に教えた技法が役に立つ」。私は、そんな技法を身につけて恋愛を重ねるよりも、フィリア、すなわち友人との愛情を大切にしたいと思う。

新約聖書に善かれている「アガペー」という言葉を「愛」という日本語に翻訳したために、近代以降の日本人には、かえって愛がわかりにくくなってしまった。「アガペー」を「慈悲」と訳して、愛はむしろセックスや物欲などと結びついた執着する感情であると区別すれば、愛をめぐるさまざまな誤解は解けたと思う。

普通の職場では、勤続年数とともに少しずつ難しい仕事を任せられていく。組織には、そのようにして人間を鍛える力がある。特定の分野で10年間、一生懸命仕事をすれば、他の人と比較して秀でた、あなたの能力を十分にいかせる仕事が必ず見つかる。そして、その分野で第一人者となることが、あなたが組織で気持ちよく生きるための条件となる。老子が言うように、釣りの技術を身につけた人は、一生食べていくことができるだろう。

1万円札をつくるのにかかる原価は、紙代、インク代、人件費を含めて約22円だ。原価22円の紙切れで1万円分の商品が買えるのは、1万円という紙幣にそれだけの購買力があると誰もが信じているからだ。

気をつけなければならないのは**擬似命題**だ。擬似命題とは、前提に難があるので、そもそも意味がない命題のことである。たとえば、「ウサギの角の先は尖っているか、それとも丸いか」という設問において、そもそもウサギには角がないのでこういう命題には意味がない。2015年1月に起こった「イスラム国」による日本人人質事件で、テロリストは72時間以内に身代金2億ドルを支払うよう要求した。これは典型的な擬似命題である。

分割して考えれば問題点が見えてくる。身代金の支払いに銀行送金は馴染まない。現金か金塊で支払うのが通常だ。百貨店で用いる紙袋に100ドル紙幣をいっぱい詰めると50万ドルになる。新札は追跡されやすく、テロリストが受け取りを拒否するので、使用済みの100ドル紙幣を準備しなくてはならない。だが、紙幣の総重量は約2トンになる。72時間以内にこれだけ大量の使用済み紙幣を集めることは不可能だ。金塊で準備するとしても約4・5トンになる。これだけ大量の紙幣や金塊の受け渡しを密かに行うことも不可能だ。こうして見れば、「イスラム国」の目的がカネではなく、日本政府を翻弄すること**だ**というのは明白だった。しかし、日本のマスメディア関係者や有識者は、「身代金を支払うべきか否か」という擬似命題に精力を割くことになってしまった。

未知の問題が出てきたとき、それを分解して易しい部分と難しい部分に分ける習慣ができていれはうろたえることはない。そして、**最も難しい部分の解決にめどが立てば、それ以外の問題はきれいに片付いていく**。擬似命題に足をすくわれなければ、どのような問題でも解決の糸口を見出すことができるわけだ。

やってみせて、言って聞かせて、やらせてみて、
ほめてやらねば人は動かじ。

話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。
やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず。

山本五十六

ときどき「作家の才能があつてよかったですね」と言われることがある。半分お世辞なのだろうが、たしかに**文章を綴ることが苦痛ではない**。また、**表現したいこともたくさんある**。それだから、**1カ月に400字×1200枚くらいの原稿を書いている**。客観的に見て、かなり多くの文章量ということになるだろう。しかし、それは才能というより適性と訓練に依存する要素が大きい。適性というのは、そもそも私はインドア派で子どものころからプラモデルづくりやアマチュア無線に熱中していたので、小学校の校庭や公園で泥まみれになってサッカーや野球をプレイすることはなかった。

・・・

「どうすれば作家になれるのですか」という質問を受けることもよくあるが、私は「99%の努力と1%の才能だと思いなす」と答えている。ここで重要なのは1%の方だ。いくら努力を積み重ねても、その人に1%の才能が備わっていなければ無駄になるということだ。その意味で、**自分に才能がない事柄にエネルギーを投入しないようにしなければならない**。

資本主義社会で大金持ちになりたければ、大会社での競争に勝ち抜いて役員になり、年5000万円を超える役員報酬を得るか、起業して儲けるしかない。大企業で役員になれる人はごくひと握りにすぎない。また、起業する人は多いが失敗する人も多い。失敗すると多額の借金を背負うこともある。もし起業に成功しても、個人事業主や零細企業の経営者では、年収1000万円を確保することは難しい。さらに常に他人を使わなければならない。言い換えれば搾取し続けなくてはならないので、かなりタフな精神が必要になる。そこまでして富者になろうとは思わない人も少なからずいるだろう。

富者にならなくてもいいから、貧者になることだけは避けるというのが現実的な処方箋ではないだろうか。その場合に重要なのは、簡単には取り替えられない熟練労働者になることだ。技術と経験を身につけた熟練労働者ならば、名誉と尊厳を維持しながら、日本社会でそこそこの生活を楽しむことができる。

ふくらんだ財布は心を軽やかにする。 ベン・ジョンソン

2015年9月19日未明、参議院本会議で安保法制が強行採決されたとき、国会周辺では安保法制に反対するデモが展開された。あたかも日本に政治の季節がやってきたかのようだが、政治がますます空虚になったというのが私の率直な感想だ。

まず、今回の安保法案が採択されたことで、明日にも戦争が起こるわけではない。戦争法案ならばもっと気合いが入っていて、わかりやすい内容になるはずだ。

・・・

今回の法案の本質は、日米同盟が戦後の國體にくたいと確信している外務官僚が、頭の回転があまり速くない自民党の政治家たちをうまく操って想いを遂げたということにある。もっとも、法案自体には創価学会を支持母体とする公明党がさまざまな地雷を埋め込んでいるので、実際に有事になったときは、もう一度ゼロから議論のやり直しになることは確実だ。

フランスで発生した同時多発テロ事件に対して、日本を含む先進諸国の人々は大変に憤慨した。2015年11月13日金曜日の夜（日本時間14日未明）、フランスの首都パリで発生した同時多発テロ事件は、わずか1時間の間に7カ所でテロ攻撃がなされた。130人が死亡、350人以上が負傷した。

・・・

しかし、軍事攻撃でISの拠点を全面的に破壊しても問題は解決できない。率直に言うと、オランダ大統領は怒りで原因と結果を取り違えてしまっている。ISが国際社会の秩序を混乱させている原因であるという見方は間違いだ。1916年、イギリス・フランス、ロシアの間でサイクス・ピコ秘密協定が結ばれ、これに基づいて中東の宗教、歴史、地理、部族の分布などと無関係に国境線が引かれた。このような欧米の都合によって建設された国家が機能不全を起し、ISが生まれた。ISは原因ではなく結果なのだ。

ISを除去しても、中東に安定した新秩序が形成されない限り、別の名称の団体が似たようなテロを起こすことになる。だが、近未来にこの地で安定した新秩序が形成される可

能性は低い。したがって、アッラー（神）によって制定されたシャリーア（イスラム法）に基づいて、暴力やテロに訴えてでも全世界を単一のカリフ帝国（イスラム帝国）によって支配しようとする運動は今後も続く。

これに対する「天井のない悩み」とは、解決することがおそらく不可能であるような悩みだ。「人間はなぜ死ぬのか」「生きていることの意味は何なのか」「愛する人と死後の世界で再会することができるのか」などという問題が、そのたぐいだ。こんなことを考えるのは一見ばかばかしいように思えるかもしれないが、私はそのようには考えていない。人間の能力に限界があることを皮膚感覚で知るためには、解決することのない「天井のない悩み」を抱えていることが重要だと思うからだ。理性や合理性を重視しすぎた近代人は、その結果として、**将来人間は悩みをすべて解決できるという誤った楽観主義を抱くようになってしまった**。こういう楽観主義が二度の世界大戦という大量殺教と大量破壊をもたらしたのだ。

長谷部氏の批判は、ユーモアのセンスにも富んでいて実に面白い。自民党が、**自覚に都合のよい発言をした人を「専門家」として持ち上げ、都合が悪いときには「素人」としてこき下ろす**発想の背後には、学術的知識を信用しない反知性主義がある。反知性主義とは、客観性、実証性を軽視もしくは無視し、自らが欲するように世界を理解する態度を言う。高等教育を受けている人でも、司法試験に合格して法曹資格を持っている人でも、反知性主義者になることはよくある。反知性主義者に客観的、実証的なデータを突きつけて、知識と論理によって説得しようとしても無駄だ。この人たちは知識や知性を憎んでいるので、そういう説得に耳を傾けない。**雰囲気、気合い、絆などの抽象的な原理を尊重して、自分と親しい人々との関係を崩さないことを重視する**。

理由も分からずに押し付けられたものを
大人しく受け取って、
理由も分からずに生きていくのが、
我々生きもののさだめだ。

中島 敦「山月記」

現在、私は4回目の転機を迎えている。**慢性腎臓病が進行しているため、人生の残り時間について真面目に考えなくてはならない時期に至っているのだ**。

自分の知識と経験を次世代に継承することが重要になる。また、大学院を修了してからもずっと続けている神学研究成果をまとめなければならない。2014年、同志社大学神学部から神学部名誉教授の称号を授与されたが、これを機会に神学の博士論文を書く

ともに、神学部で特別講義を行って私の問題意識を後輩たちに伝えたいと考えている。まず、ナショナリズムとキリスト教に関する本格的な講義を行うために、久しぶりにロシア語やドイツ語の専門書と格闘しているところだ。

人間が一人で生きていくことはできない。最近は一夫一妻という選択をする人が増えてきたようだが、やはり**結婚して家庭を持った方がいい**と思う。私は1回目の結婚には失敗した。25歳で、まだ相手との価値観や相性がよくわからないうちに結婚してしまった。その結果、人生の方向性がずれてきて、**14年目に離婚**した。離婚には、結婚の3倍くらいのエネルギーが必要になる。離婚したときは、もう結婚はこりごりだから一人で生活していこうと考えていた。

・・・

逮捕、起訴され、東京拘置所の独房に512日間勾留され、マスコミで徹底的に叩かれた。日本の裁判では、起訴された場合**99・9パーセント有罪**になる。そういう私と結婚する人などいないと思っていたが、以前からつき合っていた**外務省の後輩が、「仕事を辞めて結婚する」と**言ってくれた。私が職業作家になる可能性がまったくなかったころのことだ。妻の愛情と勇気に、私はとても感謝している。それと同時に、1回目の結婚がどうして失敗したか、よくわかった。お互いに人生の経験が少なかつたせいでもあるが、**自己中心的で、相手の気持ちになって考えることを怠った**からである。

クロノスとは、年表や時系列表をクロノロジーというように、流れていく時間のことだ。

カイロス**は**クロノスとはまったく異なる時間理解で、英語では**タイミング**と訳す。

賢き者とは、
セックスより楽しいこと
見つけた者のことである。

オルダス・ハクスリー／イギリスの作家

モスクワにいますと、1年に2回、強い幸福感を味わう。トイレットペーパーを購入したときだ。ソ連ではトイレットペーパーが大変な欠乏品で、普通のロシア人は新聞紙で尻を拭いていた。トイレットペーパーは紙専門店でも半年に1回くらい入荷される。「○月×日にどの店でトイレットペーパーが販売される」という情報がロコミで数日前に流れると、その日は会社や役所を休んで行列に並ぶ。トイレットペーパーの購入は一人10個までに制限されていた。トイレットペーパーのロールに紙ひもを通し、タスキがけにした「戦利品」を持ち帰るときの幸福感を今でも覚えている。

結局、2000年までに北方領土問題は解決しなかったが、森喜朗首相とプーチン大統領の相性がよかったので、2001年3月には「イルクーツク声明」という文書ができ、北方領土交渉に加速がついた。しかし翌月、小泉純一郎政権が成立して田中真紀子氏が外務大臣になり、北方領土問題をめぐる田中氏の出鱈目な発言で、外務省は大混乱に陥った。北方領土問題の解決をライフワークとする鈴木宗男氏が田中氏と対立するのは、必然的な流れだった。筋論、外交政策としては鈴木氏が完全に正しかったが、ポピュリズムの嵐の中で世論は田中氏を応援した。

第二に、人生の残り時間が気になる。私の場合、鈴木宗男事件に連座し、2002年5月に東京地検特捜部に逮捕され、投獄されるという出来事がなければ、63歳まで外務省に勤務していたはずだ。定年退職した後は東京を離れ、京都に小さな家を買う計画だった。京都には母校の同志社大学があるので、神学部の図書室に通って神学や哲学の専門書を読むことができる。おそらく関西の私立大学の特任教授になって、ロシア事情か国際政治について学生たちに教え、趣味でキリスト教神学の本をチェコ語から日本語に訳して自費出版していたことと思う。

しかし、人生の歯車がずれてしまい、職業作家になった。作家活動を始めたのは45歳のときで、作家としてはかなり遅いスタートだ。それだから、遅れを取り戻すために一生懸命勉強して、書いている。作家としてやりたいことはたくさんある。しかし、肉体的、精神的に充実した活動が出来るのはあと10年だと思う。その10年間にできる事柄を。今のうちに絞り込んでおかななくてはならないのだが、なかなかそれができない。

それに知りたいこともたくさんある。私の場合、情報の大部分を読書によって得ているので、睡眠、食事、入浴、原稿執筆、構想ノートづくり、外国語を学習する時間を除いては、ほとんど読書をしている。

作家としてある程度作品が売れるようになると、マスメディアに出演したり講演したりすることを余儀なくされるが、私はテレビには出ないという原則を貫き通し、講演も厳選している。人生の持ち時間を自覚させてくれる老いは、必ずしも悪いことではない。

病床で母は、臨死体験について語っていた。2004年春に母が悪性リンパ腫を発症し、敗血症を起こしたときの出来事だ。私はその日、たまたま母の家に泊まっていた。自宅のベッドで寝ている母が、突然歌を歌い出した。隣の部屋で本を読んでいた私は、「お母さん、どうした」と話しかけるが、母は「お母さん、どこにいるの。いつ（沖縄の）久米島から出てきたの」と頓珍漢な返事をする。自分の母親がやってきたと勘違いしているようだ。意識が混濁しているようなので救急車を呼んだ。救急隊員は、「最高血圧が50台まで下がり、

脈も弱くなっている。生命の危険がある」と言う。さいたま赤十字病院に担ぎ込まれ、医師の診断を受けると、「重篤な状態だ。助けてあげることにはできないかもしれない」と言われた。幸い、このときは化学療法が効いて2日で母の意識は戻った。しかし身体を動かすことはできず、**2カ月ほど病院で寝たきりの生活**をした。